

ごあいさつ

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。

2001年10月、当時千駄ヶ谷にあった津田ホールで開催した第1回から24年、本日15回目の「徹の笛」を迎えることが出来ました。

24年間で15回、ここまで長かったようにも思えますし、とても短かったような気も致しますが、私自身としては、それぞれの回に強い思いがあります。

多くの皆様にお力をお借りし、支えられ、また励まされ、続けて来ることが出来ました。謹んで御礼申し上げます。

その第15回となる今回の「徹の笛」の準備を進めている中で、令和7年秋の褒章において、紫綬褒章を受章することとなりました。

恐縮の極みとしか言いようがないのですが、笛方や囃子方は注目していただいたり、評価（高低にかかわらず）を受けたりする機会が少なく、そこに光を当てていただいたという意味でも、とても有り難いことと感じております。

この会は、毎回試行錯誤の連続となりますが、今回も協演者のお二人はじめ、スタッフや関係者の皆さんにも、いろいろとご負担、ご迷惑をお掛け致しました。

また、御助成、御後援をいただきました皆様方にも、心より感謝申し上げます。

そして、この寒い時期、師走のお忙しい中を、ご来場いただきました皆様方に、あらためて厚く御礼申し上げます。

ありがとうございました。

福原 徹



写真 大塚進治

福原 徹

(ふくはら・とる／邦楽囃子笛方)

1961年東京生まれ。六世福原百之助（四世寶山左衛門・人間国宝）に入門、福原徹の名を許される。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。

邦楽囃子笛方として、長唄・箏曲などの演奏会、日本舞踊・歌舞伎の舞台、放送、海外公演等で、篠笛・能管の古典演奏活動を続けると共に、笛を中心とした作曲に取り組む。

2001年「徹の笛 第1回福原徹演奏会」（津田ホール）で平成13年度文化庁芸術祭大賞（音楽部門）を受賞。以後「徹の笛」を、紀尾井ホール、紀尾井小ホール、銀座王子ホール、東京文化会館小ホール、国立劇場小劇場、ヤマハホールにおいて第14回まで開催。令和5年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。令和7年秋の褒章において紫綬褒章を受章。

東京藝術大学、洗足学園音楽大学、清泉女子大学、立命館大学などの非常勤講師を歴任。NHK文化センター（青山、浜松、名古屋、柏）講師。東京、浜松、彦根などで指導にあたり、「百笛会」を主宰。

一般社団法人長唄協会会員。創邦21同人。大田まちづくり芸術支援協会アドバイザー。

文部科学省検定 中学校音楽教科書「中学器楽 音楽のおくりもの」（教育出版）著者。

CD:「徹」「徹の笛」「lift off」ほか。

福原徹公式サイト

<https://fukuharatoru.jp/>



常磐津文字兵衛

(ときわす・もじへえ／常磐津節三味線方)

1961年東京生まれ。歌舞伎出演、他ジャンルとの共演など多くの分野で演奏活動を続けている。また作曲家としても作品が国内外で演奏されている。

平成6年より東京藝術大学で後進の指導に当たる。平成20年度文化庁文化交流使。

21年度日本芸術院賞。

24年重要無形文化財総合認定保持者。

26年度紫綬褒章。



中川俊郎

(なかがわ・としお／作曲家・ピアニスト)

桐朋学園大学作曲科卒業。作曲を三善晃、ピアノを森安耀子等に師事。〈Music Today '82〉国際作曲コンクール第1位。1988年村松賞、2010年第28回中島健蔵音楽賞受賞。他にCM音楽界においても「ACC賞」等受賞多数。

フォンテックからCD管弦楽作品集「沈黙の起源」、299 MUSIC からCDピアノ作品集「メッセージ」/ 佐藤祐介 × 中川俊郎」をリリース。

日本現代音楽協会理事、日本作曲家協議会常務理事。

●主催:「徹の笛」実行委員会

●舞台監督:本野 正 ●制作:伊藤裕子/渡辺美/シーエイティブロデュース ●グラフィック:長田彰デザイン室 ●協力:加藤繁治/楠瀬寿賀子

徹の笛

第十五回 福原徹演奏会



2025年 12.19 (金) 19時開演 [18:30開場]

ヤマハホール [ヤマハ銀座店7階]

主催:「徹の笛」実行委員会

後援:公益財団法人日本伝統文化振興財団 / (有)邦楽ジャーナル
JAPAN TRADITIONAL CULTURES FOUNDATION

助成:アーツカウンシル東京 [東京芸術文化創造発信助成(単年助成)] 芸術創造活動

ARTS COUNCIL TOKYO



作曲者不詳

序の舞より

笛 ● 福原 徹

常磐津

薪荷雪間の市川—山廻り—

弾き語り ● 常磐津文字兵衛

笛 ● 福原 徹

福原 徹 作曲

舞楽図屏風 [初演]

笛 ● 福原 徹

休憩

地歌

ゆき

笛 ● 福原 徹

福原 徹 作曲

中川俊郎 ピアノパート作曲補佐

千年の桜 [2025年版 初演]

笛 ● 福原 徹

ピアノ ● 中川俊郎

序の舞より

「序の舞」は能楽の舞の囃子の一曲で、ゆったりとして気品のある静かな舞。鬘物や公達、老人の舞などに用いられる。長唄など近世邦楽の中でも、様々な場面で用いられている。

実は、次の曲目である「山廻り」にも出てくるのだが、私は能管ではなく竹笛(篠笛)で吹いている。その代わりと言うわけではないが、「序の舞」の一部を抜粋して、能管の独奏で吹かせていただく。

薪荷雪間の市川—山廻り—

三升屋二三治作詞、五世岸澤式佐作曲。初演1848年河原崎座。新山姥、市川山姥とも呼ばれる。この作品の眼目である、山姥の四季の山廻りの部分を抜き出して、「山姥」と題し舞踊会でもよく上演されている。今回もその部分を演奏する。

第13回「徹の笛」(2023年6月国立小劇場)でも取り上げた曲だが、今宵は文字兵衛氏お一人の弾き語り。

文字兵衛さんとは、藝大入試の実技一次試験の待機場所で自己紹介し合い、帰りに一緒に銀座でご飯を食べた、という本来そんな悠長なことをしている場合ではない時からの、長いお付き合いである。彼は早くから作曲にも積極的で、その初演に何度も参加させていただいた。

今月は京都南座の顔見世にご出演なのだが、先に頼まれたからということで、今日だけ抜けてこちらに来てくれる。以前は一緒に即興演奏もしていたし、彼自身も笛が得手であるし、今宵限りの対一。私がどこにどんな笛を入れようとも、彼は驚かないであろう。

舞楽図屏風

俵屋宗達を追いかけ続けている。最初は「風神雷神図屏風」。その後は本阿弥光悦との作品に惹かれてきたが、辻邦生の「嵯峨野明月記」の影響もあったかと思う。

そして、最近「舞楽図屏風」。京都の醍醐寺にある。関西方面へ行くたびに確認するのだが、いつも空振り。それが2020年の暮れにアーティゾン美術館で展示され、ようやく対面することが出来た。(ちなみに、レンブラントと初対面したのも、そのアーティゾン美術館の前身であるブリヂストン美術館であった。)

三島由紀夫は、「もっとも均整のとれた豪華」と書いている。

ゆき

流石庵羽積作詞、峰崎勾当作曲。地歌の名曲、古典邦楽全体の中でも屈指の名曲。

古典の美しい旋律に焦点を当て、笛の独奏で取り上げるという方法が、一つの「形」となるかどうか。篠笛という素朴な楽器を通して歌うことにより、音楽の核心部分のようなものに少しでも迫りたいと思っている。

千年の桜

2004年第2回「徹の笛」で、謡曲の一部や西行の和歌を用いて「千年の桜」と題した作品(笛・謡・太棹三味線・ピアノ)を発表した。その中に、福島県三春町の「滝桜」の姿に刺激を受けて作った器楽部分があった。後日、そこを抜き出して膨らませ、笛・太棹三味線・ピアノによる「壁」を発表、2006年第3回「徹の笛」で「三重奏曲」と名を改めて発表した。

2011年の震災直後、ユーストリームのチャリティライブで中川さんとご一緒した際に、笛とピアノだけでその「滝桜」部分を抜粋し「千年の桜」と称して演奏した。その後、新たな章を加えたり外したり、尺八を加えたり…と、機会あるごとに構成や編成を変えて作り続けてきた。

2016年第8回「徹の笛」では、笛・尺八・太棹三味線・ピアノによる「千年の桜」(2016年版)を発表、さらに手を加え2019年第10回「徹の笛」で2019年版を発表。

2020年第11回「徹の笛」では、笛・ピアノによる2020年版を発表。そして昨年、第14回「徹の笛」で2024年版を発表、部分的にはあるが今年も既に3回演奏している。

最初のバージョンから21年。「千年の桜」全てのバージョンで力を貸して下さっている中川さんとの共演も、「国境を越えて」以来、今年で23年となる。

[福原 徹]

